

Y11c 美術館でのアートと天文学のコラボレーション

大西浩次(長野高専), 鈴木幸野(志賀高原ロマン美術館)

天文学は宇宙をどのように見てきたか。21世紀になり、宇宙の起源や生命の起源、第二の地球探しなど、人間の持つ非常に根源的な疑問に答えることができる時代になりつつある。観測装置の高度化や観測結果の複雑のなかで、どのようにすれば、最新の天文学と人々の感覚を繋いで行くことができるであろうか。

この一つの試みとして、最新天文学と現代アートを融合させ、新しい表現を作る過程において、これまでに無いスタイルの天文教育が展開できる可能性がある。いま、長野県山ノ内町立「志賀高原ロマン美術館」では、2015年7月18日(土)~10月12日(月)まで、「宇宙を見る眼、アートと天文学のコラボレーション」展を行なっている。そこでは、宇宙とはなにか―「宇宙を見る眼」をコンセプトに、最新の科学技術からアート作品まで、さまざまな「眼」を通した宇宙像を提示することを目的としている。

展示内容として、天文学側から、長野県内の東大木曾観測所シュミット望遠鏡に使用された撮像装置や乾板プレート、国立天文台野辺山45m電波望遠鏡で使用された受信機やその発展としてのアルマの受信機などを展示する。同時に、プレイペンとして行なった、山ノ内町全小学校(4校)における、「天文学者(大西浩次)×アーティスト(山極満博)」のキャラバン・ワークショップ(2015年5月7,12日)や、国立天文台・野辺山アーティストインレジデンス(2015年5月25日~28日)の公募により選ばれた長野県ゆかりの5人のアーティストにより制作された作品、さらに、長野県にゆかりのあるアーティストたちによる「宇宙」の展示など多角的な展示を示しながら、全体として現代の宇宙観を表現している。同時に、これらの企画の活動自体が、一つのアートであり、新しい天文教育の創造の場であるとも考えている。